

見守り続けるチカラ、綴り続けるチカラ

～見守り会議と「広報やまもと」の発行～

五個荘山本町は人口648人、244世帯で高齢化率約28%の自治会である。かつては、旧旭村役場や山本尋常高等小学校があり、旧村で中心的な役割を果たしていた地域である。自治会の福祉委員会では「見守り会議」で見守り活動に取り組んでいる。そして、昭和63年（1988）5月から発行されている広報誌は、五個荘山本町の歩みの貴重な記録となっている。

1. 見守り会議の開催

(1) 見守り会議の概要

五個荘山本町（以下、山本町）の福祉委員会では、偶数月の第2火曜日の19時30分から自治会館で「見守り会議」を開催している。

山本町福祉委員会が設立されたのは、平成30年（2018）4月である。平成29年（2017）12月29日に東近江市社会福祉協議会（市社協）主催、五個荘地区社会福祉協議会（地区社協）共催の「つながりづくり講演会」がきっかけに設立され、「見守り会議」が開始された。

「見守り会議」には、自治会長、福祉委員、市社協地域福祉課の五個荘地区担当職員、社会福祉法人六心会地域支援担当職員（地域支え合い推進員）が参加する。

「見守り会議」では、独居高齢者など「気になる人」を、11名の福祉委員が担当して日々の見守り活動を行っている。なお、民生委員・児童委員は福祉委員も兼ねている。

福祉委員は、日常的な見守りと五個荘地区社協が実施する「独居高齢者見守り訪問活動」で月1回の安否確認を行っている。

(2) 見守り会議の様子

見守り会議では、例えば、「Aさんはデイサービスを利用しはじめた」とか、「Bさんは最近、険しい表情のことが多く気になる」とか、「Cさんと話しをしていると、行ってもいないところに『行った』と言ったりするようになり認知症の進行が気掛かり」といった内容がそれぞれ報告される。

報告を聞いた他の福祉委員からは、別の視点からの様子が報告されたり、遠方に暮らすご家族の情報などが伝えられたりして、情報の共有と更新を行う。

見守りの際の「困りごと」や「対応に迷うもの」についても報告され、他の福祉委員から助言があったり、連絡すべき専門機関を教えたりしている。



五個荘山本町自治会館

(3) 見守り活動の方法

現時点では、「見守りマップ」や記録シートのような情報共有のための紙は使っていない。

その理由は、万が一紛失した場合、対象者に迷惑がかかるからである。この方法で見守り続けるためにも、一人の福祉委員が多くの人を担当しないよう、10人を超える福祉委員が担当制で活動している。山本町は20組あるので、平均1人の福祉委員が2組分を担当する。

(4) 気づき・受け止め・つなぐ

ある福祉委員は「福祉委員の役割は『気づき』『受け止め』『つなぐ』と教わったが、人によって『気づき』の度合いも異なるし、『受け止め』方にも温度差がある。『つなぐ』ためにはどこにどのようにしてつなぐのかを知ることが大切。私たち福祉委員のレベルアップ、スキルアップが必要」と話す。

見守り会議はコロナ禍でも中止せず、開始されて3年が経過した。

日々見守っている方々の心身の健康状態の変化や、人との関わり方の変化に気を配りながら、見守り続けている。



見守り会議の様子

2. 「広報やまもと」の発行

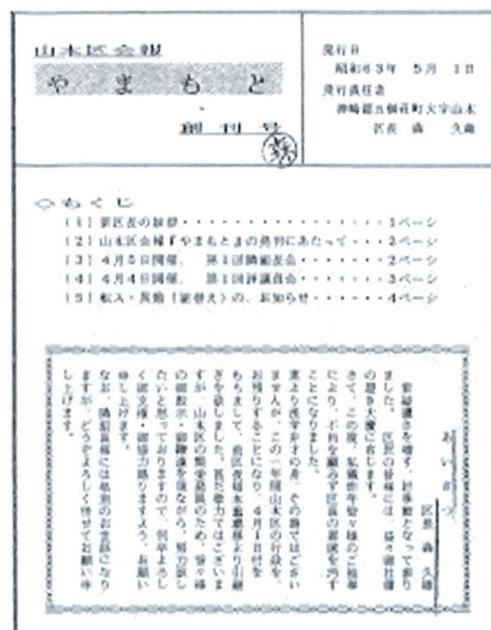
見守り活動を含め、山本町内の出来事や行事などを伝え続けているのが「広報やまもと」である。

「広報やまもと」の前身となる「山本区会報やまもと」は昭和63年（1988）5月1日に創刊された。発行責任者には「神崎郡五個荘町大字山本区長 森 久雄」と記されている。

編集責任者であった小泉茂さんは「発刊にあたって」の記事で、「山本区、区民の声として、区の会報を発行したらどうか、その事が、明るい山本の町づくりになり、当山本区の活性化になるのではないかと（中略）ここに山本区の会報として『やまもと』を発行することになりました」とその経過と願いが記されている。

第3号から「山本区広報」となり「広報やまもと」に名称を変え、昭和、平成、令和へ元号が変わり、令和2年（2020）度に発行数は390号を越えた。

「神崎郡五個荘町大字山本」から「東近江市五個荘山本町」へ住所表記が変わっても毎月欠かさず発行されている。五個荘山本町の人と暮らしを綴り続けている貴重な記録である。



山本区会報「やまもと」創刊号